

20. 釈迦と構造主義

奥村克行 秀瀬真輔 金川英雄
(東京武蔵野病院)

十二因縁生起説は釈迦の思想の中核であり、彼はこれを悟ることで解脱した。苦しみの生成や克服の方法を説明するが、難解で様々な解釈がある。十二因縁生起説を個人の精神の内面を表す理論と考えると、釈迦の精神に対する考え方を示すと考えられる。

釈迦の思想とポスト構造主義には、実体や現前の見方に共通点がある。他方で、ポスト構造主義は現前の生成を構造主義の方法論で説明するが、釈迦の思想ではその方法論が不明である。今回、釈迦が精神を構造主義的に考えていた可能性を検証した。

精神を構造主義的に考える理論として、現代ではJ. ラカンやJ. デリダなどの理論がある。理論の構造面に焦点を当て、ラカンの理論と十二因縁生起説との比較を行った。

十二因縁生起説の伝統的な解釈とは異なるが、前提として、十二因縁生起説が個人の内面の精神活動を表し、通常の思考で理解できる哲学であり、実体概念を措定していないと仮定した。個々の要素を現代的な知識や概念で読み替え、ラカンの理論と対応付けを試みた。

結果は、十二因縁生起説の無明から有までの過程が現前の生成過程を表すと考えることが可能で、シェーマLの大文字の他者からエス、他者、自我までの矢印に示された流れとの対応付けも可能と考えられた。つまり、両者は構造として同型であった。また、現前や世界の生成についての無知、無自覚が構造の生成やそれに基づく認識を生むと解釈し、また実在論的齟齬を苦しみと解釈すると、両者の見方は類似すると考えられた。

結論として、釈迦は構造主義的方法論を用いた可能性がある。また、実体や現前に対する考え方や方法論の共通性から、釈迦の思想がポスト構造主義と相同な思想である可能性がある。

釈迦がこのような創造を成し得た理由については彼の時代の通念や思想界全般の状況など様々な点を考慮する必要があるが、釈迦は現代的な思考を行い、倫理、哲学において現代を先取りしていた可能性がある。

21. 文学の創作に見る、夢体験と病理体験のはざま

——フランツ・カフカの小説作法に寄せて

新宮一成 岡田彩希子
(京都大学大学院人間・環境学研究所)

夢はどういう場合に、精神病的であると感ぜられるのか？ その手掛かりは、夢は眠りの番人である、というフロイトのテーゼにある。夢の機能は、現実を否認してさえも、人を眠らせるものだ。

カフカの小説は、眠りの不可能に倫理的な意味を与える「不眠小説」である、ということ演者は前に書いた。しかし、より徹底した言い方ができるのではないだろうか。すなわち、小説を書くことで、その作家は眠っているのである。起きているつもりで小説を書いているが、実は、眠ることができているのである。なぜなら、その小説自体がそのまま夢だからである——夢は私にこう言う。君は起きていると思っているが眠っている。なぜなら君は夢を見ているのと同じように小説を書いているのだから——。

この状態は、長編小説『城』に顕著である。眠るという問題が、しつこいトルネロのようにして出てくる。カフカ28歳の日記にはこうある。「はっきりした夢が、ぼくを同時に眠らせない。ぼくは自分の側でちゃんと眠っているのに、ぼくは夢と関わなければならないのだ。(……) このように眠れないのは、専ら書くせいだと、ぼくは思う。(……) 特に夕方、更に朝など、ぼくに何でも出来るようにさせ、(……)素晴らしい状態が近づいて来て、(……)」。

眠れなくても、「書くこと＝夢見ること」を実践する。それによって眠る。夢と同じく、覚醒世界を否認して眠る機能を果たすのがカフカの文学である。とすれば、カフカの精神的な面での病は、まずは不眠症であろう。その不眠はどこからきたのか？ 20歳代半ばで肺の上部に軽い曇り。その数年後に日記における激しい不眠の記述。その後には咯血。不眠は、結核の初期症状であった可能性は高い。

カフカは眠れずに起きて書いており、夢を見ているという意味でだけ眠っていた。彼は掟という、起きても眠りこけている世間の何ものかへと、眠りによって引き摺り込まれることはなかった。